

十分程で爆撃は終わった。  
防空壕から這い出て前方を見ると、雑木林は跡形もなく  
消え失せ、人が形を失って驚れ伏し、糧秣は四散し、米の  
焼け焦げる臭いが鼻をついた。

夜が来た。

屋間の出来事が夢であったように、空には星が瞬いてい  
る。ふと、指先が冷たい手榴弾の肌に触れた。そうだ、此  
奴は私の手で投げられのを待ちわびている……。行こう。  
戦友のところへ。私たちは前線へ向って歩きだした。

沖繩戦線、五月中旬の一日であった。

### 沖繩戦線（本島地区）の 日米両軍兵力について

沖繩作戦（天一号作戦）は五〇万の本島民を戦火に巻き  
こんだ、未曾有の一大防衛作戦である。沖繩本島における  
第三十二軍兵力は、昭和十九年八月には第六十二師団、第  
二十四師団、第九師団旅団第四十四旅団の三個師一旅であ  
ったが、レイテ島方面の戦勢不振から急拠第九師団を台湾  
に抽出転用され（同年十二月）、米軍上陸時の兵力は二個  
師一旅に砲兵軍、船舶部隊、現地召集兵を合算して約十万  
であった。これに対し、沖繩本島攻略のアメリカ第十軍の  
兵力は、第七師団、第九十六師団、第二十七師団、第七十  
七師団、それに第一海兵師団、第二海兵師団、第六海兵師  
団、第八十一師団（戦域予備）の八個師団十八万であって  
更に機動艦隊の艦載機延一万余が参加していた。制海権と  
制空権を失った日本軍は作戦準備期から洞窟による抗道戦  
（土量戦）を実施し、当初米軍上陸時には水際撃滅主義の  
戦策を樹てたが、第九師団抽出後は戦略持久主義に転じて  
三カ月に及ぶ防衛作戦を戦い、遂に玉砕した。

## 座談会

### 第三中隊を語る

（昭和四十七年四月八日午後七時。名古屋千種区桐林町桐林旅館において）

（出席者）

佐藤 宮雄	神戸 芳朗	佐橋 鋭司	川合三喜男
織田 直澄	吉田 広繁	須崎治良八	山中 高光
中島 幸雄	若杉 安一	江尻 正之	水野 秀俊
蔵本 竹一	鈴木 義正		

（司会）

井土 邦一（旧姓 山内）

司会者 皆様お忙しい中にお集り戴いて有難うございます。今夜は「第三中隊を語る」ということで、うちの中隊の北支時代、沖繩時代を十分にお話しただきたいと思えます。第三中隊はご承知のように北支の山東省、山西省、河北省、河南省と広い中国本土の殆ど三分の一を転戦しまして、沖繩で玉砕をとげたわけですが、まず臺北戦線、次に沖繩戦線の順で、お話を伺って行きたいと思えます。

#### 馬鞍山の戦闘

司会者 そこで臺北戦線ですが、第一に印象に残る戦闘という点、昭和十七年十一月の第三次魯東作戦。山東省博山県における馬鞍山の戦闘だろうと思えます。

水野 その通りだ。ここは三國史の昔から、「馬鞍を制するものは博山を制す」と謂われた博山県第一の要害だからね。この時、第三中隊は大隊の第一線です。えらい戦闘でした。

織田 私が状況を説明しますよ。敵は共産軍山東従隊第四旅、于学忠軍。

水野 よく覚えとる。

織田 いや、当時の新聞記事をもつて来た(笑声)

中隊が攻撃したのは馬鞍山の、馬の鞍の上、丁度タテガミ

司会者 第一楼門に突入したら、人一人、やつと通れる位の道でした。木も草もない。吉田さんは川本中隊長殿と一緒でしたか。

吉田 ええ。先頭でした。隊長殿の後になつて第三楼門まで突破したんですが、断崖の屏風岩の上に堅固な陣地があつて、其処から、凡ゆる物が投下されました。軽機、小銃弾の外に手榴弾、大石、木材、椅子、机。水壺まで投げおとして来るんです。その屏風岩を、人梯子を組んで攀登したんです。足立曹長、戸谷軍曹が一緒です。

司会者 吉田さん達が第三楼門に突入したあと、どうしたわけかあの扉がびしゃつと閉まつて、我々と分断されましたよ。

織田 そり、そう。あれは友軍の砲弾が大扉に当つて、内側に反り返つたんだ。そこへ積んであつた大石が崩れおちて来たんで、扉が釘付けにされて開かなくなつた。それで分断されたんです。我々は、中隊の先頭が屏風岩を攀じ登つて行くのを下から見て、支援射撃をしていた。

吉田 七十度という急傾斜を、敵弾を浴びながら突進して行くのですから前後でバタバタと倒れました。隊長殿が私の直ぐ前で倒れたのが、この時でした。機銃弾を五発受けられて、壮烈なご戦死でした。戦闘がすんで、あとで聞いたのですが、隊長殿は最期の時に通信紙をひろげて「天

に当る部分です。一千米の頂上から山脚にかけて、上から第一楼門、第二楼門、第三楼門と三つの関門が続いて、細い帯のような小径で連結してある。敵の主陣地は第一楼門の断崖の真上にあつた。これを中隊は下から攻めあげた。若杉 そり、そう。中隊は夜行軍で到着して、休息する間もなく攻撃にかかつたんです。聯隊砲はあとから来た。水野 僕は大隊本部に出たから知つて居るんですがね、攻撃の前に三度も、白旗をもつた軍使を送つとるんです。降服せんかとね。所が、返事はなくて猛烈に上から射つて来た。それでこつちも攻撃を決意したんですね。敵は陣地の裏の絶壁から、婦人や子供を網で降ろして逃がしたようです。徹底的に戦うつもりだつたんでしょう。

司会者 攻撃の前に、下から重機で制圧しましたね。

水野 僕の横に重機銃の銃座がありました。あの時、どういうわけか、バッチョロ笠を被つた一人の男が水桶を天坪棒で荷いまして。あの細い道を上へ登つて行くんだ。重機がそれを狙つて撃つ。弾道が秋空に吸いこまれるように飛んで行く。男のまわりにバ、バツと煙があがるんだが、これが当たらない。ひよい、ひよいと身軽に登つて行く。覗いた……当つたかな、と思つて居ると、また、ひよい、ひよいと登つて行く。とうとう、第三楼門の上まで登つてしまつた。これは印象的でした。

皇陛下万歳」と書かれたのです。もう、口がきけなかつたからでしょう。

水野 僕も沢山の戦友に死なれて、最期のときに「おつかさん」とか「かあちゃん」とかいうのは随分聞いたが、こんな壮烈な最期というものは、初めて見ましたよ。

司会者 隊長殿は三重県の方でしたか。

佐藤 そり、そう。三重県安濃郡の草生村という所です。

司会者 確か内地の部隊から、第三中隊長に赴任して来られたのですか。

佐藤 はい。赴任して来られたのが、昭和十七年の春です。当時私は三中隊から旅団長閣下(奥村半二少将)の当番に出ていたのですが、ある朝、副官殿から、「今日はうちの部隊に内地から川本中尉という人が見える。お前、張店の駅までお迎えに行つて来い」と云われまして。寒い朝でしたが、駅まで行きますと、隊長殿はもう、着いて待つておられました。

司会者 第一印象はどうでしたか。

佐藤 はあ、一見して温厚な人柄の方だと思ひました。童顔で、鼻の下にチョッピリ生えたひげがよく似合ひまして、軍人というより懐かしい小父様というかんじでした。私が敬礼すると、「おう」とにつこりされましてね。愛嬌のある表情でした。

司会者 あなたが中隊に掃られたのは。  
佐藤 呂果からです。それから伝令として隊長殿につき  
ました。

司会者 一寸、ずんぐりして、小肥りの方でしたね。  
佐藤 それが、一旦戦闘開始となると、動作は恐しい程  
機敏でした。あの身体で、よく動きまわるなと思われる程  
敏捷な人でした。

神戸 佐藤さんよ。隊長殿の居眠りは有名だったぞ（笑  
声）これはもう、部隊中誰知らぬ者はなかつたねえ。

佐藤 いや、いつか作戦の掃りに師団長閣下の訓示があ  
りましてね、隊長殿は最前列に腰かけておられたのですが  
例のごつくり、ごつくりが初まつて、私はこりや、えらい  
ことになるぞとヒヤヒヤしたものです。

鈴木 吐のすわつた方だったよ。眠つていても、要点は  
ちゃんと逃がさない。

神戸 あのかん高い声を出すな、行軍の時の。

佐藤 そう、「出発準備」という号令……出、発、準、  
備、と一言つ短かく区切つて、いたわるような、励ます  
ような、なんとも云えない優しい調子がありましたね。

司会者 普通、大休止の時にあの号令を聞くと、また地  
獄へ向けて出発かといふかんじになるのですがね……。

佐藤 まあ、お前ら辛かろうが、一緒に頑張つてくれい

という、いたわりの響きがありましたな。

神戸 そうそう。よく、分つとるぞといふかんじだつた  
な。兵隊の心を掴んでおられたな。

佐藤 やっぱり、武人の鑑というのは、こんな方のこと  
を云うんじゃないか。

馬鞍山の時も、例の機敏さで、あつという間に第三機門ま  
で駆け登つて行かれた。あゝ隊長殿が出られたな、と思つ  
た時はもう、絶壁をぐん／＼登つていた……惜しい方でし  
たねえ……。私は、川本中尉殿を思うと、いまだに胸がぢ  
んと鳴つて仕様がないうです……。

（しんとなる）

司会者 ご遺体を、山から降したのは夜になつていまし  
たね。

中島 ええ。毛布にくるんで、博山まで降して、火葬に  
しました。私らが衛兵に立ちましてね。

司会者 （明るく）隊長殿はまあ、煙草が好きで。

鈴木 ああ、夜行軍の時なんぞ、もう喫いたくて耐らん  
という感じだつた。「着」や「金鶏」が切れた時はあの、  
赤ん坊の絵のついたのを喫つとられたしやないか、中国煙  
草の赤い袋の……。

中島 「ザ、ベビイ」だ。上海の大昌公司で作つてる十  
本入りだ。「キャピタル」も十本入りだつたな。イギリス

煙草で「ハタメン」というのもあつた。それから……。

司会者 中島さん。いつ専売局へいりましたか。

中島 なんの。ここえ、当時の煙草の袋を持つて来とる  
（笑声）。

水野 物もちのいい人だな。織田君も中島君も要領がえ  
え。それで生き残つたのかね。（爆笑）

司会者 川本隊長殿は、松見中尉殿のあと、中隊長にな  
られたんですね。松見隊長殿は威風堂々といふかんじだつ  
た。あの馬上で掃隊された姿を覚えてるでしょう。

織田 ああ覚えています。去年お会いしたがなつかしか  
つたな。

#### 城頂山の戦闘

司会者 三中隊が華北戦線で一番戦果をあげたのが、昭和  
十八年一月の城頂山の戦闘です。これは一月七日から十  
四日までの戦闘ですが、この山は山東省の中部、膠濟線沿  
線の青州（益都）の北東三十軒。寿光附近に当ります。  
敵は国府軍、保安第十五旅でした。

織田 沂州から各小隊毎に行軍して、城頂山に到着した  
な。山上に展開して、敵と対峙した時は一面の雪景色だつ  
た。戦闘は勝ち戦のせいか、割と早く結着がついた気がす

るな。

須崎 そうよ。敵の俘虜を、沢山掴まえたやないか。橙  
色の脚絆つけた兵隊やつた。

織田 戦利品がすこかつたでしょう。

須崎 ああ。迫撃砲、重機、軽機、小銃。算えきれん程  
あつたな。引地部隊長殿からうちの中隊に感状が出たやな  
いか。

司会者 そうです。鈴木昇兵長、近藤一夫、杉浦清上等  
兵の三人です。敵中に飛びこんで、武装解除した上に敵兵  
を大勢引卒して掃隊したわけです。

須崎 そうだ。部隊長殿が喜ばれて……。あの晩だつた  
かな、引地さんがローソクを日本刀でスパッと輪切りにさ  
れた……。さすが剣道の名人だけあるな。

織田 そうですよ。余程うれしかつたんだらうなあ。

#### 田柳庄の戦闘

司会者 では次に魯中作戦。山東省中部の、田柳庄の戦  
闘に移りましょう。

これは昭和十八年四月十二日の戦闘でした。部隊長の引地  
中佐殿が戦死されるという、大変な激戦でした。では、  
神戸さんから……。

神戸 敵は国府軍です。勇敢だったぞ。三中隊は金森中尉殿が中隊長代理の時分だ。おい誰か弁の立つ人おれの代りに説明してくれないか。おれはこのマイクが苦手です。

(笑声)

江尻 (横から) 自分がやります。前任兵殿。

神戸 まじめにやれ。(笑声)

水野 横着な男だ、昔から。(笑声)

江尻 田柳庄陣地は、日本陸軍の築城教範によつて構築したという、陣地というより要塞でした。これを蒋介石直系軍が守備しておりまして、歩兵、工兵、戦車隊連合で攻略するという激戦でした。

神戸 ま、大体よかろう。(笑声)

江尻 普通の陣地攻撃ですと、歩兵が真っ先に飛び出してその両側に重機。後ろから歩兵砲が押し出して行くのが定石ですが、この時は歩兵砲が先頭に出て、ドカンドカンと射ちまくった。それから重機銃が掃射する。軽装甲車が協力して射ちまくる。そのあとがうちの中队……歩兵がはじめて出るという戦法でした。前任兵殿、これでもいいかね。

神戸 待て。大事な点を一つ落しとる。

歩兵砲、軽装甲車が射ちこんだあと、工兵隊が壕に飛びこんで架橋した。おれ達はその橋を渡つて突撃した。とにかく

く、敵前に展開したのが四月十二日の朝だ。

江尻 午前八時でした。敵弾をおかして飛び出して行くと思つて(障害物)がある。それを突破して前進すると巾十数米の壕。それを、工兵の架けた橋を渡ると深い落とし穴があつて、前方に二十米の城壁が聳えている。大変な従深陣地ですよ。

神戸 敵兵が城壁の上にすらつと鉄帽を並べて、まあ、撃つも射た人も……。

司会者 友軍の歩兵砲も、ずい分支援してくれたでしょう。

神戸 しかし、あの城壁は厚かつた。歩兵砲の砲弾がぼんぼん、弾ね返るんだ。

山中 城壁の上から、柄のついた手榴弾を投げつけられたな。

司会者 そうそう。ワンバウンドして飛んで来た手榴弾を受けとつて、投げ返した兵隊がいましたね。

神戸 ありや、同年兵の竹下万蔵だ。それから、手榴弾ぶつけられて「打撲傷」受けたのがおつたぞ。

山中 ああ、通訳の金山さん……。不発弾でよかつたよ。

司会者 水野さん、この時は。

水野 僕は航空整備学校へ派遣されてました。

神戸 そりやよかつた。あんたは、不発弾ですみませ

んぜ。精進がわるいから。(笑声)  
山中 敵は勇敢でしたな。撃たれるとすぐ交替兵が頭を出して射撃してましたからね。

織田 こっちも、すごい気魄でしたよ。敵の追撃砲で足首を飛ばされたのも気づかずに、五、六歩前進して射撃姿勢をとつた兵隊がいました……。

江尻 漸く城壁を乗り越えたと、掩体壕だ。それから敵の主陣地。もう、気が遠くなるような従深陣地です。だから、入城して占拠した時は、夜になつていました。

司会者 では引地部隊長について。  
蔵本 部隊長殿が戦死されたのは、田柳庄の翌日、四月の十三日です。

神戸 あれは田柳庄附近の、三官廟という部落の掃蕩戦だったんだ。これは、司会者話してくれ。あんた、部隊長殿の後にいたんだから……。

司会者 では御免を蒙りますか。この時も三中隊は第一線です。前方に炎々と燃えあがる民家があつて、敵は其所から盛に射つて来た。中队はその前に展開して、射撃していた……。そこへ、部隊長殿が走つて来られた。三中隊何をしよう、前え出んか、一寸腰を上げられたとき、燃えている民家の二階からパンとモーゼルで射たれた。しかし、銃剣術七段の、気丈な方です。顔色もかえない。三

中队、あれを射てつとなおも叱咤される。そこへ山内副官が来て、部隊長殿、当つておられますから……といつて無理に後方へ下つてもらつた。

神戸 それから、済南の病院へ飛行機で運ばれたんだ。司会者 そうです。部隊長殿の負傷を旅団長閣下が聞かれて、上空を飛んでいた友軍の直協機をおろさせて、それに乗せて、済南の陸軍病院へ運んだのです。

水野 (のりだす) そうですね。

神戸 オヤ、座り直したぞ。何だね。(笑声)

水野 僕は済南できいたんだ。部隊長殿を飛行機に運びこんだ時はもう昏睡状態だね。それでも、うわ言で、頻りに指揮を取つておられる。前え出ろ、とか、何をしようとかね。所が上空へ上ると急にふわっと失神状態になる。

それで操縦士がね……。こりやいかん。これではとても済南まで持たない。活を入れねばならぬと判断してね。昏睡が深くなると、パン、パンと機関銃を上空へ射ちあけるんだ。すると、うつすら眼をあけられる。暫くすると、また昏睡に入る。また機関銃を射つ。まあ、それを何べんも繰り返して、やつと済南の飛行場へ着いたと云うんだ。

神戸 大した気転だね。すると引地部隊長殿が亡くなられたのは済南の病院か。立派な方だった。

司会者 では、河南作戦に参りましょう。

河南作戦（京漢作戦）

司会者 中隊が太行山脈の陵川から澤州に行軍して、河南省の黄河北岸に集結したのが、昭和十九年の四月初旬です。大黄河を渡河して敵の霸王城陣地の正面に展開したのが四月十六日。

佐橋 今度はすごい大作戦だぞという予感があったね。大軍が続々と集結して来たからね。

蔵本 うん。何百台という戦車が砂塵を濛々と巻きあげてやって来たよ。虎兵団（戦車第三師団）だ。

鈴木 師団では、遺骨箱を一千箱、準備していたというね。大作戦だからな。

司会者 それはもう、大作戦も大作戦か。あとで知ったことだが、これは大陸打通作戦といって、河南省から仏印（ベトナム）まで、アジア大陸を一気にぶち抜こうという作戦だったのですよ。まるでジングスカンの大長征です。

鈴木 日本本土への空襲を防ごうとしたのかね。

司会者 まあ、それが第一でしょう。

佐橋 恩賜の煙草を買ったな。

鈴木 そう、見たこともないような下給品を、ずい分もらいましたよ。

佐藤 霸王城陣地は、丁度田柳庄の陣地を大がかりにしたようなすごい要害だったな。断崖絶壁の上に、銃眼が三層についていた……。

川合 そうそう。中隊が攻撃したのは、「フカ」陣地です。あの突撃路は鈴木さんが開いたのですね。

司会者 鈴木さん、出発したのは四月二十日でしたか。

鈴木 ええ。午前三時です。豊田少尉殿の下に、私達兵隊が三名ついて偵察に出かけたわけですよ。将校斥候です。

「フカ」陣地の、敵前五十米の所でべら棒に射たれましが、匍匐して行つて、絶壁に縄梯子を投げあげたのです。私が登つていつて、銃眼から飛びこんだら、中はひっそりして居るのです。オカシイナと思つてのぞいて見たら、敵の逃げ出した直後でした。

司会者 その報告で、中隊が飛びこんだのですか。

鈴木 そうです。後は洛陽まで思つく間もない追撃戦になりました。

佐藤 あれは馬鹿でしたか。追撃の途中、カーチス機に銃撃をくらいましたね。

神戸 爆弾も落とされたよ。黄磷弾を束にした奴が、バラバラ降つて来た。

佐橋 あの時、青天白日のマークを付けた飛行機を初めて見たな。ビックリしたよ。

司会者 中隊最初の対空戦闘ですよ。  
神戸 あれは、禹県城正面の、麦畑を行軍中に襲撃されたんだ。

司会者 深田中隊長殿が戦死されたのが五月四日、黄崗店の戦闘です。腹部貫通でしたね。

鈴木 この時の状況は誰も知らないだろう。指揮班が全員戦死してるから。一つ、思い出すことがある。河南作戦に出発する前、私が隊長殿にきいたことがあるんだ。隊長殿、来年の正月はどこでやりますかとネ。すると、笑つて云われたな。まあ、溟土だよ。

神戸 ウン。（うなずく）ヒゲの濃い方だったよ。

佐橋 黄崗店では、ものすごく射つて来たな。

司会者 三中隊は、珍しく大隊の最後尾を行つていましたね。

鈴木 西林中佐殿が云われていた。深田の中隊が後備を固めとるから安心だと。

司会者 洛陽と云えば中国河南省の古都ですが、大隊は戦車隊（虎兵団）の後から突入しましたね。それから逃走する敵を追撃して洛河に出て、河原で敵機の銃撃を受けました。大分死傷者が出ました。

佐橋 酒井衛生兵が戦死したのはこの時だよ。

佐藤 新井曹長が重機の高射托架で、一機落としたよ。

鈴木 そう。あの人は大した度胸だよ。敵機が掃射してくるのに真向うから敵機に向つて射ち続けていた。照準を放さないものネ。

司会者 洛陽から盧氏まで強行軍をやりましたね。

織田 あれはえらかつたぞ、九日間に百八十里（七二〇軒）歩いたんだ。誰もかれも、足の裏は全部マメだ。木綿針に糸をつけて、それをヨードチンキに浸してマメを通すんだ。みんな涙をこぼしていたな。

司会者 こうして何つて居ると、不思議に戦死された方の名前が上つて来ない。どうしたわけですかね。まあ華北の戦闘というものは行軍の苦しみはあつたが、敗軍の戦闘はなかつた。そのせいでしょうかね。

須崎 そうかもしれません。沖繩のことは一つ一つをハッキリ覚えて居るのに、北支の記憶はその向うに茫んやり霞んでいる。時間的には北支は昭和十九年の夏までで、沖繩はそのあと僅か一年……。ずつと続いている筈なのに、夢に出てくるのは沖繩ばかりですよ。不思議だねえ。

織田 そりや当然ですよ。沖繩の戦闘は地獄の底を這いまわつたんだから。何も華北の戦さが楽だったというわけじゃないが、沖繩は大東亞戦争最大の激戦でしたよ。両方を較べても比較にならない。北支では、負傷者は五人に一人だった。沖繩では五人に一人が負傷者。あとはみんな戦

死者です。それ位の違いがある。

神戸 そこですねえ、司会者さん。我々は時々集ると、北支は北支組、沖繩は沖繩組で固まつてしまつて、てんでに自分達の話ばかりしておる。我々は昭和十九年七月の編成替で、華北に残つたり、他部隊へ転属したりで、実は沖繩の事は詳しく知らないんだ。今夜は我々北支組に充分聞かせてくれませんか。結局、沖繩戦の生存者は何名。

司会者 はい。こちらの佐藤宮雄さん、鈴木義正さん、吉田広繁さん、須崎治郎八さん、それに佐橋鋭司さん、中島幸雄さん、山中高光さん、織田直澄さん、それに私。もう一人、今夜は見えていませんが伊藤久男さんを入れて、計十名です。

神戸 三中隊の沖繩の……。当時の人員は。

司会者 戦時編成ですから、沖繩の防衛召集兵百名を加えて約三百名です。機関銃隊も一部配属されていましたが。

神戸 すると、三百人が十人になつたわけだね。開封のそばの、小宋鎮で別れた浅井太平、井土宇吉、稻垣三郎、小林鎌太郎、小野田鈴勝。それに木村曹長（木村千里）。元氣者が揃つていたのになあ……。

司会者 では沖繩へ移ります。北支の方は聞き役に廻つてもらいますか。

### 沖繩の戦闘

司会者 まず、呉<sup>ウヰ</sup>を出港して、沖繩本島の泊港<sup>とまり</sup>に上陸したのが昭和十九年の八月十九日、三日間の航海でした。輸送船のなかで日本の紙幣を買つたので、これは有難い、内地掃蕩だとみんな兵隊は大喜びでした。所が沖繩だつたわけで、一寸がつかりはしたが（笑声）よし、沖繩の島守りになつてやるぞと決心した。それから、明けても暮れても陣地構築……熱田、知念、最後に阿波茶と、よくやりましたね。

中島 壕内のあの湿度には驚きましたな。マッチの火が点かない。湿度百パーセント。

佐藤 マッチの頭が割れたこともある。しかし中隊の士気は高かつたね。この壕で敵を迎え撃つんだといふ気魄がもう漲つていた。

山中 今のブルトナーがあれば、三日間で掘つてしまふらうだね。

佐藤 そりや、陣地構築は大変だつたが、まだこの頃は極楽でしたよ。熱田の国民学校（小学校）でハブとマンダースの勝負を見たり、黒砂糖をなめたりね。まだまだ、のんびりしていた……。

鈴木 私は熱田の村長さんと那覇まで歩いて行つたことがあるがね。村長さん、靴を手にぶら下げて、裸足で歩くんだった。そして那覇の入り口へ来ると、急いで靴を履く。

織田 娘さんもそうだつたよ。熱田を出る時、荷物と下駄を頭にのせてネ。那覇へ入ると、下駄をはく。可愛いかつたネ。

中島 軽便鉄道があつたらう。

鈴木 ああ、製糖線のことだろう。小さな汽車、箱馬車みたいな。

中島 そう、時間が来ても出ないから、何時出るのかと運転士に聞いたら、お客が一杯になつたらなあ……（笑声）

司会者 のんびりしてましたな。

佐橋 あの花は何でしたか、全島どこにいつても咲いていた紅い花。

吉田 仏桑葺。

佐藤 ありや印象に残つとる。織田さん、あんた、衛生兵だから、ずい分島内を廻つたでしょう。衛生法救急法なんか教えとつたじゃないか。

織田 いや、穴掘りしてるあんた方にはすまないが、泡盛はずい分御馳走になつたナ。腰をとられて、戸板にのせられて掃蕩したことがある。もう一べん、沖繩へ行つて、

あの部落を廻りたいナ。

佐橋 また、衛生法救急法か。（笑声）

司会者 それから、昭和十九年十月十日の空襲があつて四月一日を迎えるわけですが、三月二十四日に大隊本部に入つた報告、これが中隊がきいた米軍関係の第一報です。「勝連半島の沖十三軒に巡洋艦一、駆逐艦四を発見」。翌朝、甲号戦備下令です。

中島 慶良間へ敵が上つたのが、三月二十六日ですね。あの頃、伊祖の台地から見ると、沖の艦船が日毎に増えていきましたね。上陸の当日など沖は艦船で一杯だつた。

司会者 徹底的に物量を集中したわけですよ。我々の敵前上陸とは観念がちがう。嘉手納<sup>カテナ</sup>にいた第十二大隊は完膚なきまでにやられました。大隊は伊祖、阿波茶、城間、屋宮祖の高地に分哨を配置して、最前線の分哨は牧湊に置きました。鈴木さん、中隊が牧湊の鉄橋を爆破したのはいつでしたか。

鈴木 四月の十八日です。野畑少尉殿以下三名で、私も行きました。之を爆破して敵の渡河を阻止しようといわけです。二十軒爆弾の雷管をつたのと、十軒の急造爆雷とをつないで、これが一気に爆破しました。

司会者 米軍はその直後、四本の舟橋を架けて渡河して来たわけで、十九日の早朝、伊祖高地を占領した。その夜

長澤隊が夜襲戦を戦つたのですが、そこで、阿波茶から伊祖高地へ向つた鈴木さん、その夜の状況をひとつ。

鈴木 詳しいことは手記にかきましたから省きますが、阿波茶の出発が夜の十時頃、台地の間を抜けて集合地へ向かう途中、蘇鉄林で敵と衝突しまして、小隊長殿（野畑満治少尉）小野田鈴勝兵長、鬼頭政雄一等兵が戦死し、あとは乱戦となつて小隊は全滅しました。それから私は負傷の足を引かずつて阿波茶の陣地へ帰つたわけですが、陣地で、吉田さんに会つた時は心強かつた……。

司会者 吉田さんは留守で残つたのですか。

吉田 私は旅団勤務から帰つた直後なので、一個分隊を預けられて、留守部隊を命じられました……。四月二十日の朝ですよ。夜襲の結果がさっぱり分らない。一体どうなつたんだらうと心配になつて、私、単身で指揮班壕へ行つたら全滅だといふんで、びつくりして阿波茶へ帰つた。その時鈴木さんが血だらけになつて、足を引かずつてとびこんで来たんです。

司会者 間もなく、敵襲を受けたのですか。

吉田 そうです。壕の入り口に敵兵が顔を出して、いや射つわ、射つわ。壕内は煙で息も出来ない位です。敵はガムを噛みながら、射ちこむのですが、有難いことに壕内は暗い。敵からは中がよく見えなわけです。所がこちら

は向うの顔がハッキリ見える。有利でしたね。

鈴木 吉田さんは、敵の手榴弾をひとつ掴んで投げ返してましたなあ。阿修羅のようだった。

吉田 足下へとびこんで来た奴が、シユ、シユッと煙を吐きながら旋廻しとるんですわ。これをひろつて叩きつけましたよ。

鈴木 何べんか、敵兵が飛びこんで来ましたナ。

吉田 ええ、腰だめ射撃で撃退しました。手榴弾は安全栓をぬくひまがないので、岩にぶつけて発火させて投げました。鈴木さん、忙しかつたですねえ。

鈴木 ああ、ひろつては投げ、発火させては投げ、その間に射撃もしましたナ。

司会者 沖繩の人がいたでしょう。

鈴木 ああ、炊事の小母さん達……。あの人たちは壕の一番奥へ隠しました。無事でしたよ。大體沖繩の人……。現地召集兵は夜襲に参加せなかつたですよ。古年次兵は別として。隊長殿が弾薬運搬等に廻されたんです。

司会者 これは特記しておかねばいけません。それで敵が後退したのは。

鈴木 夕方です。あとで歩兵砲の山中明さん（山中少尉）にきいたんですが、経塚から支援射撃をしてくれたんだそうですよ。

司会者 そうですか。

鈴木 岩本繁雄兵長……。あの人は気強よかつたな。大胆なものですよ。壕口に立ちふさがつて、腰だめでパンパン射つていた。弾丸が切れて来たら、いきなり、壕内に積んであつた急造爆雷を取りあげてね、敵に投げつけようとした。

吉田 私とめました。こつちもお陀仏になりますから。

それだけは止めてくれと……。〔笑声〕

司会者 十軒爆雷ですからネ。一緒に吹つ飛ば。

織田 あの人は五年兵だ。うちの中隊は北支で戦つて来たから強いですよ。

司会者 では、中央を前進した指揮班、第三小隊に移りましょう。これは生存者は織田さん一人ですか。

織田 そうです。あの伊祖の高地の下、井戸に到着したのが午前二時前。攻撃発起は二時です。所が待つても、待つても外の小隊が攻撃を開始しない。その中二時をすぎて高地の左の方角で銃声があつた。

鈴木 それだよ。我々が敵と衝突したのは。

織田 我々はね。井戸の前の広場を集つて、息をひそめてあんな等の攻撃を待ちながら、高地の上を覗んでおつたんだ。一小隊も来ない。二小隊も来ない。そこで長澤隊長殿が決心されたんだ。「行くぞ」という声が私の耳許でし

た。それなり、まつ暗な坂を駆け上つた。あの台地の真下に来た時に、照明弾が上りやがって、どどと射たれた。隊長殿の脇には堀軍曹、鈴木昇兵長、それと私がいたと思う。野田忠夫上等兵もいたな。当番の佐藤来君もいた。中島 ああ、佐藤来君は知つとる。砂糖が来るといつていたもんだ。補充兵だつたネ。

司会者 すると、左第一線の第二小隊はどうなつたのですか。どこへ消えたんですか。

鈴木 それが分らない。凡らく途中で敵に遭遇してやられたんだらう。一人も生存者がいないから。

司会者 伊祖台地にいたのは、米軍の戦史によると、第二十七師団第五連隊の第三大隊です。之が台地を占領していた。そこへ長澤隊が攻撃をかけたわけです。だから台地を拠点として、あの附近に尖兵が出たのは間違いない。二小隊は途中でこれに引かかつたのでしよう。

織田 私は、堀軍曹が天皇陛下万歳という声をハッキリ聞いた。

鈴木 すると、川上博巳少尉殿も伊祖高地で戦死されたな。

織田 それから四月二十七日まで、崖の下の大隊本部壕で頑張つたわけです。

司会者 私は大隊本部へ出ていたのですが、四月十六日

の午頃、中隊へ連絡に帰つたんですよ。すると隊長殿が、「ご苦労だった。まあ、食事でもして行け」と云われる。私も自分の中隊へ帰つて来た安心感があつて食事を一緒に食べていると、「中川曹長に聞いたのだが、お前は地方にいる頃、親孝行息子だったそうだな」と云われました。涙が出ましたよ。

織田 兵隊のことを、よく知つておられたぞ。

司会者 そして必々と云われました。「指揮官というものはなあ、進めば必ず死ぬと判つていても、前進を命じなければならぬ時がある、判るか」……。これが、夜襲の三日前です。苦しい心境だったと思います。

鈴木 私ら下士官によく云われたな。兵を可愛がれよとね。だけど、将校服の嫌いな隊長殿だったな。いつも兵服を着て、騎兵の赤皮の長靴を履いておられた。

織田 あれは開封の頃か。准尉から少尉になつたばかりの将校が、急に兵隊に威張り出して、まあ、名前は忘れたが、隊長殿にえらく叱られていたじやないか。

鈴木 おう、知つとる、知つとる。名前は云うな。ちゃんと復員しておられるから……。(笑声)

織田 (写真をとり出して回覧する) ここへ、隊長殿の自宅から写真が来とる。皆さん、見て下さい。四人、将校が写つておられるが、右から二人目が長澤隊長殿です。

からナ。副官殿、生やされたらどうなんですか……。山内中尉殿はイヤ、突はオレもそれで生やさない……。織田 夜襲の前日だったか。特攻機が来たでしょう。七、八機一団になつて……。

鈴木 ああ、牧湊の沖の戦艦に突つこんだ時だ。戦艦が真ッ赤に燃え上つて、スツと海に消えて、その上に黒い煙がフワツと上つて……。

織田 そう、あれを阿波茶の台上から隊長殿が見ておられてね。何故、歩兵部隊は今突つこまんのか、空地協力が全くないじやないかと地面を踏んでおられた。

鈴木 空地協力はなかつたな。空は空でやつて呉れという感じだった。隊長殿の戦術眼は正しいですよ。

特攻機が、あれだけ突つこんで呉れたのにね。

司会者 織田さん、あなたは四月二十日の朝、隊長殿以下五名の埋葬をされたわけですが、その時の状況を。

織田 私、手記の方に詳しく書きましたが、何しろ、真つ暗闇の夜襲戦の直後で、しかも台上の敵を追つ払つた後でしょう、敵がいつ逆襲して来るか分らないというぎりぎりの戦場下なので、とにかく十四、五名で大急ぎで掘つて、収容した五体を埋葬したんです。隊長殿は右から二体目でこれは私と船橋上等兵が直接収容したから、明瞭に覚えていますが、申訳ないけれども、他の方は確認していないの

司会者 どれ……。英姿颯爽としとられるナ。場所は？

織田 山東省の張店だと思ふ。この風景からして。

鈴木 おう。こりや張店だ！ 独混第六旅団司令部の附近だ。歩兵砲の将校さんばかりだ。織田君は歩兵砲におつたから、知つとるだろう。

織田 顔は皆さん、存じあげとる。写真の裏に、昭和十八年一月と憲兵隊の検閲印が打つてある……。間違いないね。

吉田 こりや張店ですよ。少尉に任官されて間もなくでしょう。織田さん、この頃歩兵砲におられた田畑大尉殿が三重県におられるでしょう。照会されたら、詳しいことが判りますよ。

織田 そういたします。

司会者 隊長殿は、日本領管に一年程就職されて、佐倉の聯隊へ入られたんですね。

それから河南省の開封だ。予備士官学校を出られて、二十一大隊の歩兵砲中隊に配属された。

吉田 三中隊の中隊長は代々ヒゲを生やされていきましたね。長澤隊長殿は生やされなかつた。

司会者 それを大隊副官の山内中尉殿がいつも云つていた。貴官、ヒゲを生やしたらどうだとね。すると、隊長殿は云うんだ。ヒゲを生やすと、塚サン貰う時に嫌われます

です。唯、この中に鈴木昇伍長がいることは間違いないですね。それと、伊祖を発掘した時、眼鏡が出て来ました。近眼鏡です。

鈴木 野田じやないか！

織田 ええ、指揮班で眼鏡をかけていたのは野田上等兵一人ですから、或はそうかも知れませんが……。それから、もしかすると、もう一人は、掘軍曹殿かも知れません。これは突撃の時、私がハッキリ声を聞いていますから……。これ以上は不謹慎にわたるといけませんので……。

司会者 ご苦様でした。織田さんは一昨年の十二月、伊祖高地へ隊長殿のご遺族の方々をご案内して、隊長殿以下五体の遺骨を収骨されて参りました。この発掘は、織田さんの描いた地図を元にして実現したのです。

鈴木 私はあの記事、中日新聞で見つくりしたんだ。こりや奇蹟ですよ。

須崎 やつぱり何かがありますね。沖縄の方もよく協力して下さつたし……。

吉田 珍しいことじやないですか。二十五年目というのは？

織田 沖縄の方も、そう云つておられました。

司会者 これも米陸軍関係の戦史ですが、あの夜襲は、日本軍将校の戦死体から文書を押収して夜間強襲を決意し



たよりですね。その文書には、「米軍は夜襲をやらぬ」とあつたそう。それで、逆をとられたわけだ。

鈴木 (司会者に) あんた知っているかね?

司会者 残念ながら、私は大隊本部でそれを印刷して、各中隊に送つたことがあります。部隊長名でそう書いてありました。つまり米軍の戦法を、参考資料として配布したわけ。上部から来た指令ですけれどネ。

鈴木 そう云えば、我々の知る限り、夜襲は伊祖一回だけじゃなかつたか?

司会者 少くとも、他には聞きませんでしたね。仮りに大隊の出撃命令さえなければ、我々はその阿波茶陣地で戦つたわけですが。

織田 安波茶でやつておれば、敵に一泡吹かせていますよ。勝手知つた陣地だもの。三中隊だけは絶対負けない。司会者 鈴木さん、安波茶の陣地で、他に印象に残っているのは?

鈴木 あれは四月二十二日でした。安波茶の西側の谷間にあつた医務室、あそこで私が寝ていますと、藤原信一上等兵が通りかかりました。藤原じやないかと云うと、伊祖でやられましたといつて、腹を圧さえていました。腹から背中へ貫通銃創を負つたといつていました。軍医の治療を受けていたのですが、その日の中に亡くなりました。安

波茶の谷間の、西側に埋葬しました。

司会者 そうですか。四月二十二日ですね。

鈴木 そうです。

司会者 織田さんは、四月二十七日の夜まで、伊祖の大隊本部にいて、十五大隊の援兵に救出されましたね。

織田 そうです。

司会者 それから?

織田 安波茶から澤紙へ下つて、宮城の五十九高地(二十一大隊本部)へ合流しました。途中友軍の壕に行つたら逃亡兵扱いをするのでネ。喧嘩してとび出したわけですよ。隊長殿を失つてから、三中隊の兵はさみしい思いをしたな。

司会者 鈴木さんには、五十九高地で会いましたが、負傷がひどかつたですね。

鈴木 あそこで、安波茶以来初めて治療してもらいましたよ。足の骨が見えるのに、モチンぶつかけて破傷風の注射をしてくれた。でも有難かつたナ。これが治療してもらつた最後だつたから……。

司会者 結局、中隊は、伊祖夜襲で潰滅して、あと生存者はバラバラになつたわけですね。そして屋富祖で戦つた人もあれば、城間で戦つた人もあるが、五十九高地の大隊本部へ合流して、ここで殆ど玉砕した……。

佐橋さんは?

佐橋 私は伊祖の後、四月二十七日の夜ですが、仲西飛行場と宮城の間にある米軍陣地に斬込みをかけました。木村千里曹長以下十五名でした。

司会者 戦果があつたそうですね。

佐橋 相当あがりでした。吉田さんも一緒でした。

吉田 その日の夕方でした。木村曹長殿から、「吉田、今晩行くぞ」と声をかけられて私共準備にかかつたんですがね。曹長殿がこう云うんです。十五人を三組に分けて敵陣地の右と左と、中央の三方から突込め。着剣するな。腰だめ射撃もやるな。無言で匍匐前進して、突込め、というわけですね。

司会者 着剣するなというのは?

吉田 剣が光るからです。

司会者 そりやそうだ。

吉田 それで、夜中の十二時すぎでした。砂地を三方から匍匐で近ずいて、わあっと大きな声をあげて一気に突つこんだんです。敵は驚いて陣地を棄てて逃げました。戦利品は沢山ありましたナ。自動小銃、弾薬、軽機関銃から、無線機まで持つて来ました。残念なことに、食糧がなくてね。(笑声)……

佐橋 それで、夜が明けて見たら、敵は後ろにあつた友

軍の洞窟陣地に入りこんでるわけですね。で、発煙筒をドンドン叩きこんだら、いぶされて飛び出して来ました。これを狙撃しました。この時、堀川春吉一等兵が戦死しました。勇敢な兵隊でしたがね。

吉田 まあ。部分戦闘ですけれども、これは完全な勝ち戦でした。

鈴木 屋富祖の戦闘は判りませんか、司会者。

司会者 若干知っています。四月二十七日の午後、私、連絡に走りまわつている途中、屋富祖で井土宇吉伍長に会いました。五十米前方の麦畑に、海兵第六師団のM4戦車がずらりと布陣を終りましてネ。敵の随伴歩兵は、その影で鳴りを潜めている。まさに戦闘行動に移ろうとしている所です。井土伍長は中隊の兵隊を十二、三名連れましてネ。おれは之から彼奴に斬りこみをかけて、隊長殿の傍へ行くんだ……と、急造爆雷を抱いて、すごい気魄でした……。

鈴木 中隊の初年兵もいましたか。

司会者 他隊の者も入つていました……井土は云うんです。此奴ら、メソメソしやがつて、自決するなんぞぬかしやがる……手前を撃つ弾があつたら、一発でも敵にぶちかませろ、といま気合を入れた所だ。そう云つていました。ありありと覚えています……。私は連絡員なので、彼の手を握りしめて別れましたが、あれが最期でした。

織田 あんた、井土伍長の骨を拾ったんでしょ。  
吉田 そりや、どうして？

司会者 別れたけれど、あの人は北支以来の戦友です。気になつて仕様がなかったので、大隊本部（五十九高地）を抜けて屋富祖へ走つていつたんです。丁度戦鬪がすんで、敵戦車が引きあげていつた直後です……戦死体が累々と重なつている……一人、一人、ひき起して行くうちに、井土宇吉を発見したんです。

戦車砲弾で胸を抜かれていました。いい顔をしていました。それで遺体を焼いて、骨をひろいました。小さな箱に入れて、これはずつと持つていました。

織田 戦後、それを井土伍長の家へ、届けておるんです。感心ですよ。

鈴木 ははあ、すると何か。プライバシーに引つかつてはいかんが（笑声）あんた、沖繩戦の時は山内伍長だつた。それが井土姓に変わったのは、井土伍長の家を継いでやつたわけか？ 山内が井土になつて、井土の話をするものだから、混乱していかん（笑声）

司会者 まあ、そんなわけで……（笑声）

織田 生命があつたら、妹を貰つてくれというのが、井土伍長の遺言だつたんですよ。屋富祖で別れた時の……。

鈴木 そうか。いい話だよ。

司会者 五十九高地は激戦でしたね。あれが四月二十八日。大隊はもうこの時、残存員百余名です。中隊員は三十人もいたでしょうか。

鈴木 石岡曹長、大場旭上等兵、深室半右衛門上等兵、浅田中尉殿……。みんな、五十九高地にいたな。敵は、飛行機、戦車、火焰放射機、爆雷で、ガンガン攻めたて来たな。包囲されていたからね。

司会者 大隊はここで全滅でしたね。あと、五月二十三日頃、首里で沼澤准尉殿が中隊員を小効率いておられたのが、三中隊の最後の組織でしょう。その後南風原、津嘉山、喜屋武と、もうこの頃は壕雨と泥濘のなかをポロボロの軍服で撤退してました。どの兵隊も負傷がひどくて、銃にすぎり、地面を這いずりまわつていて、満足なものも一人もいなかった。住民の人も一緒に逃げていましたねえ。須崎 私らは、あちこちの壕を排廻してましたよ。ただ、中隊の人と一緒に死にたかつたな。

司会者 不思議なことが一つあります。あの敗戦と大混戦のなかで、凡らく軍、官、民三十万人以上の人が沖繩本島の南部地区に雪崩れこんで来た中で、あれは六月の十七日ですか。糸須の天然壕のなかで長澤隊員十七名がピタッと呼吸を合わせたように一しよに集つた。

中島 あれは不思議だ……。

連絡も通信も全く切れていたのに……。

佐橋 あの生地獄の中ですよ。考えられないことですわ。

須崎 なつかしかったな、あの時は。もう何というか、無性に中隊の戦友がなつかしかったからな。みんな、ピッコひきひき、鉄砲にすがつつた。織田君なんかあんたわしが、さあ行こうと云つたら、わしやもう、ここで死ぬんじや、といつて動かなかつたな。

中島 それでも、立派な軍刀を杖について、威張つていたぞ。（笑声）

織田 あれひろつたんですよ、（笑声）兵隊がよく、敬礼してくれた……。

司会者 あの時は、みんなで隊長殿の話をして、それから北支の話をして、三々五々、別れていつたなあ。しかしよく顔が合ったものだ。

須崎 だから何かがあると、私は云うんだ。

司会者 そうですね。インスピレーションで生存者が集つたんですね。ほかに云い様がない。何十万の人の群の中ですからね。

鈴木 あれから私達は、木村曹長殿の指揮で、糸州から喜屋武に向つたのですが、夜、艦砲弾で曹長殿が倒れて、もう駄目だと思う。水を呉れ」と云われるんだ。それで

私の水筒は一滴もないし、曹長殿の腰を探ると一杯入つてゐる。それを唇もとへもつて行くと、半分ほどぐまそうに呑まれてネ。手榴弾を握らせてくれと云われる……。

織田 そうですか！

鈴木 綺麗な星空でしたよ。左の方にピラミッド型の山が二つ並んでいた……。畑の中でした。

司会者 木村曹長殿は勇敢な方でしたねえ。

鈴木 翌日、ここにいる須崎さん——それに浅井太平洋長、大西栄二等兵、兵庫年一等兵にまた会つた。肩を叩き合つて別れたが、これが最後でした。その日、阿且林の死体の中で寝ていたら、シャリン、シャリンと音がするでしょう。見れば、戦車が四台走つて来る。一目散に逃げたなあ。あれに轢かれたら痛いわな。（笑声）

司会者 六月二十三日は、牛島軍司令官閣下と長参謀長閣下が自決された日ですが、その頃は？

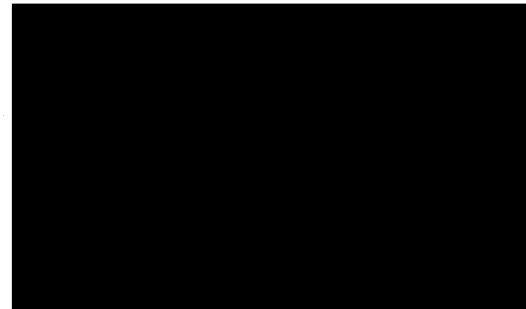
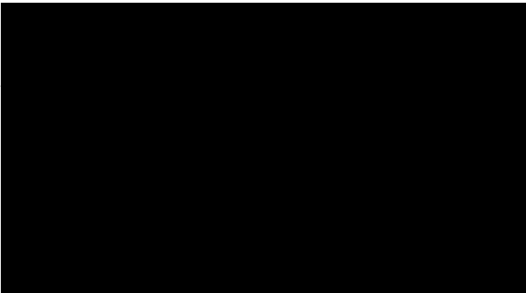
吉田 私は沼澤准尉殿に会つた。敵中を突破して固頭へ行くと云われました。それで電信柱を倒して筏を作りました。豊島精一曹長殿もおられました。伊藤久男君が沖繩の船大工をどこからか探して来て立派な竹筏を作りましたよ。

司会者 それで、脱出しましたか？

吉田 駄目でした。迫撃砲の集中射撃をうけて、喜屋武岬へ逃げました。岩本政夫君、坂下勢一上等兵も一緒に

### 第三中隊生存者名簿

氏名	郵便番号	住	所	電話番号
松見巳之吉				
足立泰造				
栗山隆吉				
上木喜隆				
○佐藤官雄				
水野史朗				
○井土邦一				
神戸芳朗				
○佐橋鋭司				
刑部 明				
川合三喜男				
○織田直澄				
佐藤 紗二				

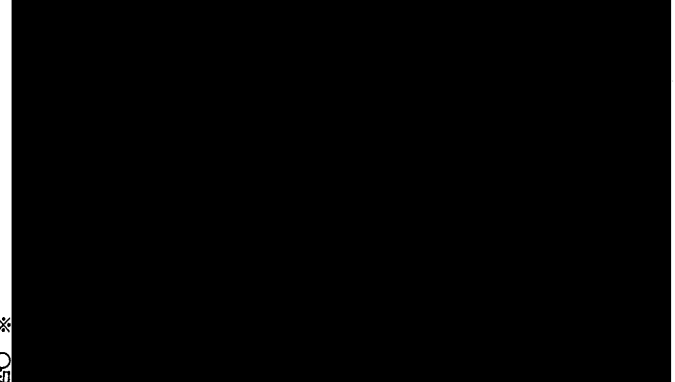


た。  
織田 夜になると、敵の軍艦は沖へ出て、煌々と電灯を点けて、音楽を流していた。  
吉田 昼はボートにスピーカーをつけて、投降勧告をやっていましたね。  
司会者 私共の戦闘が第一線防衛陣地、之が破れてからの第二線が首里の線、あと摩文仁が最後の抵抗線で、之が潰滅したのが六月中旬。沖縄軍第三十二軍は、ここで完全に崩壊したことになります。第三中隊は北支以来、馬鞍山の戦闘、城頂山の戦闘、田柳庄の戦闘、河南作戦、沖縄作戦と、主なものでも五つの作戦に参加していますが、部分戦闘を加えると、凡らく幾十回の戦闘をくり返したのち、沖縄本島で玉砕したわけです。  
この座談会を終るに当りまして、私共が華北以来歌って来ました第三中隊の歌、「三の隊の歌」を歌って、亡き戦友に捧げたいと思います。ご唱和を願います。  
(一同起立して「三の隊の歌」を合唱)

#### 三の隊の歌

いちばんのりのせんゆうが かたをたないて  
いうことには おーいらてんかのさんのないさ。  
んのゆーしだなんでもこい こいこいこいこい  
どんどこい そらとつげ-きだつ-こめだ

○吉田広繁  
 ○須崎治良八  
 ○山中高光  
 ○中島幸雄  
 石川銀造  
 森山与吉  
 若杉安一  
 江尻正之  
 太田由春  
 水野秀俊  
 長江靖三  
 蔵本竹一  
 ○伊藤久男  
 ○鈴木義正  
 石垣吉郎  
 桜田竜次  
 伊藤惣治  
 津田賢次  
 石川由雄



※○印は沖繩戦関係生存者

### 第三中隊慰霊祭について

#### 第三中隊生存者一同

中隊慰霊祭を初めて行なつたのは、昭和二十四年の四月二十日であつた。

この日は昭和二十年四月二十日午前二時、長澤中隊が沖繩本島伊祖四十八高地に夜襲を遂行、玉砕の悲運に際会した痛痕極まりない日である。同時に華北から沖繩へ転戦した第三中隊が、事実上解体を遂げた日でもある。

中隊生存者の私たちが相寄り相計つて法要の相談をしたのは、昭和二十三年春のことであつた。そして、その翌年から名古屋市千種区の覚王山日泰寺において慰霊祭の法要が行われて来た。

当初は敗戦の直後、物資不足の折でもあり、お供物にも満足なものを得られず、わずかに浅黒いパンや甘藷、手作りの野菜などを持ち寄つてお供えしたものである。

以来毎年、八重桜の咲く四月中旬に行われる慰霊祭にはお年寄りが嫁や孫に手を曳かれてお参り下さる。中には愛知県慰霊祭には参列しなくとも、この法要には必ず出席

するといわれる方もある。有難いことである。日泰寺の仏前にご遺族の方々と一緒に座り、合掌して読経の声を聞いていると、亡き戦友の列が軍靴を鳴らし装具の触れ合う音を立てて、眼の前を通りすぎるのを見る想いがする。

法要は今年で二十四回を重ねる。そして私たちが永年心掛けて来た第三中隊の記録が発行され、戦友の霊前とご遺族の方々に捧呈することが出来た。

改めて華北戦線、沖繩戦線に散華された、亡き方々のご冥福をお祈りするものである。

## 編集を終つて

### 堀賢次

(1)  
中隊の出身者でもない私などが寄稿するのは、場ちがいも甚しいし、かえつてご迷惑にもなるので固くお断り申しあげたのであるが、第三中隊とのつながりだけでも書くようにと編集委員会から再三のおすそめを賜つたので敢えてペンを執らせて戴いた。

三中隊との触れあいが始つたのは、今から十一年程前のことである。

昭和三十六年七月二十日、当時NHK芸能局ラジオ文芸部のプロデューサーであつた私は、沖繩本島に八日間の出張を命ぜられた。

沖繩県最後の県知事で、昭和二十年六月、沖繩戦の終戦と共に最期をとげた島田敷氏の事蹟を探るための取材であつた。

沖繩に出発する前日、私は出張の申告に長澤芸能局長のもとへ伺つた。

その折、局長から次のご依頼を受けた。

——ご令弟の中隊が沖繩本島伊祖高地で玉砕をとげていること。この中隊は華北から沖繩へ転戦し、昭和二十年四月十九日、同高地の夜襲戦で全滅したこと。ついでには、戦跡に花を供えて、第三中隊戦没者の霊を弔つて来てほしいこと——。

であつた。そして、その頃偶々那覇に在住されていた局長の姉上様のご住所を誌したメモをいただいて、私は沖繩に出発した。

七月の二十五日であつたと思う。

取材のあと、私は那覇市安里の福島家を訪問し、福島きくえ様のお伴をして、伊祖高地の戦跡を弔つた。琉球政府援護課の徳田安全様が同行してくれた。

伊祖高地は那覇市の北四軒、標高四十八米の巒嶺とした台地であり、戦中の姿をそのまま残していた。(写真参照) 私達は高地南側の大岩の下に花を供え、第三中隊戦没者のご冥福を祈念した。

部落の人の話によれば、戦後この高地一帯から一千五百

体の遺骨が掘り出され、それは浦添の地藏堂に収められているという。

それから、私たちは浦添へ向つた。

三中隊との機縁が開け初めたのは、実にこの時からであつた。

沖繩から帰京して間もなく、私は関西に出張を命じられた。島田知事の生家を取材するためである。

局長から、名古屋の須崎様へお届け物のご依頼を受けていたので、汽車を降りて中区の須崎モーターズへお邪魔した。中隊の慰霊祭を準備されている頃であつた。

この時お会いしたのは吉田様、鈴木様、船橋様、須崎様の四人で、まだ焼け跡の残つている空き地の傍の喫茶店で私が撮つて来た伊祖高地の写真を中心に、夜襲当夜の思い出を伺つた。

船橋敏雄様はそれから二年後に亡くなられたが、トタン屋根に明り通りの窓がついた薄暗い喫茶店で身振りを交えて熱っぽく話された表情を、今も忘れることが出来ない。

——ひどかつたなあ、沖繩は……。

船橋様が絞り出すような口調で云つたとき、今まで明るかつた四人の表情が、俄かに暗くなつて、一瞬、四人とも下俯いてしまつた。

船橋様はつつける。

——伊祖夜襲では、照明弾の下で射られました。敵の弾量と来たら、うちの中隊の一分分です。水を一杯入れた桶を逆さにして一べんにぶちまけたような弾丸でした。

吉田様が傍から口を添えた。

——シナとは違ひですよ。シナじや、まだ人と人との戦争という感じだつたが、沖繩は勝手が違つておつたナ。物量との戦いだつたナ。

この折、船橋様が鉛筆で書いてくれた伊祖の地図は、いまでも私の手許にある。

しかし、中隊との機縁が本当に熟するには、それから九年の歳月が必要であつた。

(2)  
昭和四十五年十月十五日。

長澤専務は、NHK沖繩総局の慰霊祭に、NHKを代表して出席された。

米軍上陸の直前まで電波を送り続けた沖繩放送局は、艦載機の爆撃によつて演奏室に被弾し放送機能を停止した。その後局員は三十二軍に協力して沖繩戦を戦い、多くの犠牲者を出していたのである。

慰霊祭には、琉球政府から徳田安全課長代理も出席していた。奇縁である。

専務は慰霊祭の翌日、伊祖高地に行かれ、第三中隊の

戦跡を尋ねられた。

高地は既に鬱蒼とした樹林ではなくなっていた。本土復帰を前にして、部落には文化宅住が建ち並び、台地の中腹まで人家が埋まつていた。このとき道案内をされた銘刃様という伊祖部落の婦人から一つの提言があった。——中隊の方々の埋葬地点をお調べになつて、一度発掘されて見たら如何でしょう。部落でお手伝いをさせて載きま

す。それからの二ヶ月間は、まさに神意としか云いようない時間の連続であつた。二十五年間結ばれた因縁の糸が、一度にどつと解き放されてしまつたのであろうか。

十月三十日。長澤専務からご相談を受けた。——中隊員の遺骨を発掘してみたいが、埋葬地点を記憶している生存者の方はいないだろうか。

私は十年前の記憶を辿つてみた。伊祖高地一帯から千五百体の遺骨が既に発掘されているのである。第三中隊の遺骨も殆んどその中に含まれているのではないだろうか。しかし、確かめるにはまず須崎様に会わねばならぬ。その場で電話をして、名古屋へ行つた。これが十一月七日のことである。

須崎モーターズの社長室で始めて織田様に紹介された。織田様は埋葬地点の地図をもつて来られたという。

十二月十八日、長澤泰治様、ご令弟長澤光夫様、織田直澄様、私の四人は、日航機で沖縄へ飛んだ。

私たちの車が伊祖高地の登り口に着いた時、脱兎の勢で飛び降りた織田様が、汗と涙に頬を濡らしつつ、夜襲で突撃した坂道を、一散に駆け登つていつた光景は忘れ難い。

そして永いながい間、伊祖高地の土の中に眠つた五名のご遺骨は、遺族の手で掘りおこされたのである。

(織田様寄稿「伊祖四十八高地」を参照願いたい)

翌年、一月二十四日。名古屋の日泰寺で慰霊祭が催され長澤様ご夫妻のお伴をして、私も参加させて戴いた。第三中隊のご遺骨が帰還されてから、初めての慰霊祭である。晴れていたが、凍りつくような寒い朝であつた。

日泰寺の支関口で、須崎様は両手を擦り合わせながらしみじみと云つた。

——これで、わしらの慰霊祭にも、より所が出来ました。有難いことです。

統経のあと遺族の皆様と中隊生存者の集会があつた。火鉢を囲んで膝を寄せあつた、和やかな集りであつた。

長澤様は挨拶をされた。

——これで収骨が終わったわけではありません。三中隊の収骨が全部終わったとき、私は生存者の方々にお願いして、改めて慰霊祭を営みたいと思つております。

卓の上に拡げられた地図を一瞥して驚嘆した。伊祖夜襲の戦場経過、中隊長以下中隊員の戦死地点、埋葬地点、その人数——実に詳細に書きこまれていて、余す所がない。復員以来、実に二十五年をかけて作成された地図である。深く感動した。

しかし、高地一帯からは戦後夥しい遺骨が掘り出されており、建築工事や土木工事のたびに発見された遺骨も十体や二十体ではないと聞いている。果してこの地点が、そのまま手つかずの状態で残されているかどうか。

質問の矢を放つと、織田様は首下を否定した。

——そんなことはありません。ここは岬の下です。人の近寄れる場所ではありません。

地図は航空便で沖縄へ送られ、伊祖部落給出で発掘作業が始まつた。琉球政府民生部、NHK沖縄総局が全面的に協力してくれた。十一月二十九日のことである。

この朝、長澤様が一語、一語に力をこめつつ、沖縄総局へ長距離電話をかけられていた姿を思い出す。

——頼むよ。中隊員の遺骨を、一体でも多く掘り出してく

れよ。

沖縄では全力を傾けて四ヶ所を掘つた。そして、第三中隊戦没者五体のご遺骨が発見されたのである。

ご遺族も、中隊生存者も大きく首肯した。

ご遺族の婦人が、井土様に亡き兄上のことをきいておられる。沖縄本島、経塚西方の五十九高地で戦死された伊藤精之助上等兵の妹様である。井土様はこまごまと答えておられる。

この光景を眺めながら、私は心の中で呟いた。

——三中隊の記録を本に纏めて、ご遺族にお届けしなければいけない。たとえ贈写版でもいい。私が刷ろう。

このとき私の手許には、昭和三十六年の沖縄出張以来、厚生省や琉球政府、戦史室その他で集めた若干の資料があつた。これに生存者の方々の手記を添えれば、北支から沖縄までの三中隊の足跡が描き出せるのではないか。また、大変口幅つたい云い方ではあるが、沖縄と中国の近代史を究めることは、私の年来の素志でもあり、それ以上に軍籍にあつたものの務めでもある。やらねばならぬと私は決心した。

そして四月十八日。東京荻窪の光明院で、長澤文雄大尉と中隊戦没者のご法要が営まれ、須崎様、井土様が中隊を代表して上京して来られた。

その折お二人から、三中隊の記録を発行したいというご相談を受けた。僥倖であるが、私にとつてはかねて心に期したこともあるので、喜んでお手伝いを約した。

こうして三中隊の方々と頻りに交流がはじまった。

(3)

九月になつて、残暑のこもつた名古屋の須崎モーターズで最初の編集会議をもつてから、今年の八月までに八回程打ち合せをした。

会議の場所は名古屋であつたこともあり、岡崎、豊橋であつたこともあり、また皆様がわざわざ私の住む横浜まで出向いて来られたことも度々である。その熱意には頭が下がつた。

そして、これまでの交友は沖繩戦関係の方に限られていたのに今度は北支関係の方々にまで拡がつていった。

会合の都度一貫して肝銘することは、この人々の中隊に寄せる情熱の深さであつた。

たとえば、私がこんな質問をする。

北支時代の代々の中隊長さんを覚えていますか。

そりやもう……。

水野史朗様はニコニコして肯すく。

初代が小竹憲中尉殿。憲という字は難しいですぞ。次は松見巳之吉中尉殿、川本芳雄中尉殿、深田伊知次中尉殿最後が沖繩戦で、長澤文雄中尉殿。自分は北支に残りましてから、深田隊までです。

少しの淀みもない。

北支の、初年兵時代の古年次兵は。

皆さん、秋田県の方でしたな。三浦菊治、葛西公造、田口秀美、湊勝美、平尾喜代二、大谷大監、小原竹松……。大谷さん、小原さんは衛生兵でした。それに西谷善一、津島圭三、伊藤源四郎、同じく伊藤惣治、小野梅雄、大池金之丞、泉東次郎、この方は馬鞍山で戦死されました。あと石垣吉郎、桜田竜次、今本専三郎、工藤士郎、この人は馬……。隊長殿の馬当番です……。

凄じい記憶力である。

三中隊が華北の作戦に従つたのは、シナ事変の武力撤定戦が終わりを告げ、北支の治安警備に入つた時期から（昭和十四年）中国と仏印を結ぶ大陸打通作戦の一環として、河南作戦に従軍する時期（昭和十九年）までである。

そしてこの間における作戦——治安戦は、点と線にすぎなかつた日本軍占領地区を、面に拡大して行こうとするための討伐戦であつた。とかく治安戦といえれば単なる警備行動位に思われがちであるが、事実はそんな生易しいものではない。峻険が翼に連なる山嶽地帯や波がうねる太平洋の戦闘行動は、どれ程中隊員の骨身を喰んだものか知れない。馬鞍山や太行山脈や河南平原の戦闘がこのことを明確に物語つている。

大東亜戦争の戦勢不振は大陸の精鋭師団を逐次南方へ転

出させる結果を招いたが、その空隙を埋めるために、中隊は師団の下で東奔西走しなければならなかつた。

数年にわたる大陸戦場の生活は、急激に中隊の犠牲を増嵩させた。

それだけに、生存者の追想も強烈なものを伴なうのであろう。

戦後も三十年近くなれば、戦火の記憶も次第に淡くなり戦友への追慕も薄らいで行くのが自然である。所が、歳月の重みも、この人々をかえることは出来なかつた。

昨夜、沖繩の戦友の夢をみやした。

隊長殿、どんなでしたネ。

お元気でやした。

ほお、そりやあ、よかつた。

こんな会話をきいていると、沖繩戦線の中隊長は、今も二十七歳の凛々しきで部下の胸に生きており、第三中隊は昭和二十年四月二十日未明、沖繩本島伊祖高地の夜襲戦に玉砕したのではなく、まして永遠に中隊の編成を解いたのでもなく、この日を起点として、生存中隊員の胸に新しく生き始めたことが分る。

生存者の方々の中隊に寄せる思いというものは、情熱などという生易しいものではない。骨肉の深部に刻みこまれた、消しがたい「現実」と云うべきであらう。

それは、昭和十四年二月、北支において結成され、昭和二十年四月、沖繩において玉砕するまでの七年間の中隊史を見れば理解される。

七年間に中隊長の交替すること五回、しかも五人の中隊長の中、三人は華北で、一人は沖繩戦線で戦死をとげられている。中隊員の尊い犠牲は北支、沖繩で二百名を越えるであらう。

参加した作戦は主要なものだけで六作戦。（十号、と号十二号、三号、河南、沖繩）これに華北の小規模な戦闘を入れると、出動回数は何百回に及ぶことか。（諸作戦の突態は「第二十一大隊略史」に記した）

しかも七年間における中隊の行動範囲は、華北だけではなく山東省、山西省、河南省、河北省の四省にわたり、これに沖繩本島内の移動を加えれば、軍旅の行程は実に一万余をかるく突破するのである。

この傷痕の中で結ばれた戦友愛が、中隊への深い思慕にかわつたとしても何の不思議があらう。残念なことに、公刊戦史に記録された三中隊の軌跡はただの二つである。

一つは河南作戦に、大黄河を渡河した第二十一大隊が師団の先頭を切つて威力偵察の火蓋を放つた時、そして第三中隊が大隊の先遣中隊となつて霸王城の「フカ」陣地にまづ先に躍りこんだことである。（鈴木義正兵長一番のり）

そして二つ目は、沖繩本島へ米軍上陸後の第十九日目、伊祖高地を占領した米第二十七師団第五連隊に対し、第三中隊が大隊の第一線となつて決死の夜襲を敢行したことである。

二つながら、戦史に登場する三中隊は、常に大隊の先頭を疾駆する精神な強兵中隊であつて、本記録の手記や座談会の発言をまざまざと立証している。

織田様は、私にこう述懐する。

——毎年三月の終りがやつて来ますナ。畑に出て農作業をやつています。その時ふと、あ、今日は三月の二十六日だなあと気づくのです。すると、今まで動いていた右手がはたと止まつてしまふ。何故だかお分りになりましようか。

昭和二十年三月二十六日は、米第七十七師団が慶良間列島の座間味島に上陸した日である。この人々は沖繩本島伊祖高地から、或は安波茶の台地から艦砲弾が轟然と炸裂し島の姿を押し包んで行くのをじつと監視していた。この次は本島に来るぞ、決戦だぞ、叩き潰してやるぞと滑刺した銃を握りしめて唇を噛んだ。

そして沖繩全軍の上に流れていた、鋼はがねのような、冷たく張りつめた空気を思いおこす。すると、負傷の痕がすきすきと疼きだして、全身に拡がつて来るのだという。

四月十九日になると、その疼きはますます激しくなる。

負傷の傷痕が痛むのか、神経が痛むのか、それはご本人にも定かでない。

この日、朝起きると、今日は伊祖高地に夜襲をかけた日だなと思ふ。畑に出ても、一日中気分が重い。仕事ですんで家族と夕飯の卓を囲んでも、静々と考えこんでいる。

今頃、洞窟陣地で戦友と別杯を交わしていたナ、内地の方角に向つて、おつかさん、さようなら、行つて来るぞと頭を下げていたナ……と思ひ出すと、とても晩酌に手が出ない。

お父さん、どうしたのですか、と家族に云われてはッと現実にかえる。

しかし、寢床に入つても、ああ、今頃は安波茶の陣地を出た時刻だナ、あの稜線をこえる時、艦砲弾で誰と誰がやられたナと思ひ出すと、全身が疼き、目が芽えて、終夜まんじりとも出来ない。これが毎年のことだという。

この人々と会つてみると、軍服の頃の顔がハッキリと浮かんで来る。どの人も嬉しい、立派な兵隊であつたことが分る。

そして、気の早い戦友会は戦後四、五年の闘生活の中で空中分解をとげたのに、この中隊の会合ばかりは二十七年の間燃えさかる炎のように続いている。一昨年の暮には沖繩本島に戦友の収骨に出かけた。来年の二月には遺族団を

組んでまた出かけるという。

戦後三十年になろうというのに、この炎は一向に衰えない所か、ますます燃えさかる一方である。

日中国交が開始されたら、今度は中国へ収骨に行くと云い出すかも知れない。

#### 附記

最後に一言お詫びを申しあげたい。

三中隊と私との関係が沖繩から始まり、また私自身の確認が沖繩に限られたため、この小文の記述が勢い沖繩に偏してしまつた。

中隊生存者の華北関係の方々、並びにご遺族の皆様にご心からお詫びを申しあげたい。(NHK中央研修所教授)



# 編集後記

私達が永年心掛けて来た第三中隊の記録「黄塵と珊瑚礁（リール）」を、亡き戦友、ご遺族の方々に捧げる。黄塵は北支を、珊瑚礁は沖縄を象徴するもので、二つを連ねて題名としたのは、三中隊転戦の跡を綴りたからである。

毎年日泰寺で慰霊祭が催される度に、ご遺族の方々から亡き戦友についてのお問い合わせを承わる。子供はどこで戦つたのか、兄はどこで戦死したのかという質問である。私達が戦つて来た北支、沖縄を合すると中隊員は五百名を越えるし、僅か二十人程の中隊生存者では、時にお答えに詰まることもある。まして沖縄本島の戦いとなれば生存者は指を屈する程の寂しきである。私達も五十歳を越えた。私達が健在の間にかぎりのことを明瞭にしておければ、三中隊の血と汗で綴つた事跡も、今に茫々の中に沈むであらう。中隊員の事跡を明らかにして、ご遺族をお慰めしたいというのが、本書発行の主旨である。

私達中隊生存者はこれまで二十回以上の慰霊祭を管んで来た。しかし残念なことに、沖縄の戦友の遺骨は遂に一体も選つてはいなかつたのである。沖縄本島は蘇々たる黒潮の彼方、しかも私達の敗軍以来アメリカの支配下に属して来た孤島である。その距離は実に華北戦場に劣らぬ遠さであった。

ところが、一昨年十二月十九日、真に突如として沖縄本島伊祖高地に眠る故長澤文雄大尉以下五柱のご遺骨がご遺族、戦友の胸に抱かれて無言の帰還をされ、私達は満身の慟哭をもってこれを出迎えたのである。そして今後の慰霊祭に大きな拠り所に加わつたことに

無量の感慨を覚えたのであった。これが、本記録発行の直接的な動機となつたことも記しておかねばならない。

沖縄本島の収骨に際しては、特に次の方々の全面的な協力を賜つた。ここに第三中隊生存者一同、心から深い感謝を捧げるものである。

- (当時の琉球政府民生部)
- 民政部長 平安常栄様
- 援護課長 太田金造様
- 援護課長代理 徳田安全様
- (浦添市伊祖)
- 自治会長 銘刃盛一様
- 婦人会長 銘刃初子様
- (当時のNHK沖縄総局)
- 総局長 秋山頼吉様
- 高橋祥起様
- 前田昭治様

本書の執筆編集は、生存者の多い名古屋市在住者が中心となつたが、ご多忙の中から序文を賜つた東京の長澤中隊長ご令兄長澤泰治様、また執筆を寄せられた北支時代の第三中隊長松見巨之吉様に篤くお礼を申しあげたい。

更に本書の北支、沖縄の作戦関係については、防衛庁防衛研究所戦史編纂官伊藤常男様、森松俊夫様に貴重なご教示を戴いた。また新人物往来社「歴史読本」編集長吉成勇様には数々のアドバイスを賜つた。併せて深く感謝申しあげる次第である。

野木 茂	あ い	八月	与	伊祖	与島の那間に小銃手として
林 高市	花 子	四・二〇	伊	伊祖	伊祖の戦闘に小銃手として
橋本 春吉	清 六	六・一五	武	伊祖	伊祖、安波茶、首里、武富の戦闘に小銃手として
原田専之祐	佐	六・二三	前	平	安波茶、城間、首里、東風平前平の戦闘に小銃手として
服部 昇	キミエ	四・二五	城	間	伊祖の戦闘後不明
馬場 茂	丹 治	四・二五	城	間	伊祖、城間の戦闘に小銃手として
長谷川考一	喜代蔵	四・二五	城	間	伊祖の戦闘後不明
東田 武治	千 代	四・二五	城	間	伊祖、安波茶、城間の戦闘に小銃手として
日高 貫一	ア イ	城	間	城間の戦闘後不明	
樋口安次郎	よ志友	城	間	城間の戦闘後不明	
比嘉 幸治	房 枝	城	間	城間の戦闘後不明	
船橋 敏雄				復員後死亡	
飯沼 幸三					
深望半右衛門					
古澤 稔	ふ み			大隊本部	
藤原 新一	銀 松	四・二三	安	波茶	山城の戦闘後不明
兵庫 年一	真 雄	四・二三	安	波茶	伊祖、安波茶の戦闘に小銃手として
堀川 馨	兼 松	四・二〇	伊	祖	喜屋武より不明
堀川 春吉	熊 吉	四・二七	仲	西飛行場	伊祖の戦闘に指揮班長として
牧野 茂	弥 八	四・二七	仲	西飛行場	伊祖、安波茶、城間、仲西飛行場の戦闘に小銃手として
松葉与三治	キクエ	四・二七	仲	西飛行場	第六十二師司令部
的場 正二	ト エ	四・二七	仲	西飛行場	城間の戦闘後不明
松本 詠	安 恵	四・二七	仲	西飛行場	城間の戦闘後不明
前田 菊男	きみ友	四・二七	仲	西飛行場	城間の戦闘後不明
前川 末吉	く ゆ	四・二七	仲	西飛行場	城間の戦闘後不明
又吉 清治	と 十	四・二七	仲	西飛行場	伊祖の戦闘後不明

長澤隊(第三中隊)戦没者名簿

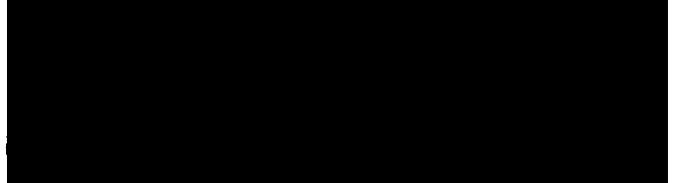
(五十音順)

氏名	担当	戦死日	場所	功 績 事 項
渡井 大平	留守	二十・六・三	喜屋武	与那原、山城の戦闘に分隊長として
足立 広行	留守	四・三八	屋富祖	伊祖、城間、屋富祖の戦闘に小銃手として
安藤 清雄	留守	四・三四	仲 西	伊祖、城間、仲西飛行場の戦闘に小銃手として
井土 宇吉	留守	四・二七	城 間	首里、城間三十二高地の戦闘に分隊長として
稲垣 三郎	留守	四・二七	城 間	首里、津嘉山、前平、摩文仁の戦闘に分隊長として
岩本 繁雄	留守	四・二〇	摩文仁	伊祖、城間、首里、摩文仁の戦闘に分隊長として
伊里 才一	留守	四・二〇	安波茶	伊祖、安波茶の戦闘に小銃手として
稲垣 光夫	留守	四・一五	城 間	城間の戦闘に小銃手として
石田 幸雄	留守	四・一五	城 間	城間の戦闘に小銃手として
稲垣 政則	留守	四・一〇	安波茶	安波茶の戦闘に擲弾筒手として
石垣 富美男	留守	四・一〇	城 間	城間の戦闘に擲弾筒手として
岩本 政夫	留守	四・一〇	城 間	城間の戦闘に擲弾筒手として
伊藤 政之助	留守	四・一〇	城 間	城間の戦闘に擲弾筒手として
稲福 政徳	留守	四・一〇	伊 祖	大陵本部員として五十九高地に於て
稲福 守	留守	四・一〇	伊 祖	伊祖の戦闘に小銃手として
尾岡 清太郎	留守	四・一〇	伊 祖	伊祖、城間の戦闘に擲弾筒手として
小野田 幹勝	留守	四・一〇	伊 祖	伊祖の戦闘に小銃手として
岡田 太郎	留守	四・一〇	伊 祖	伊祖の戦闘に分隊長として
小川 末一	留守	四・一〇	城 間	伊祖、城間の戦闘に小銃手として
大場 旭	留守	四・一〇	安波茶	伊祖、安波茶の戦闘に小銃手として
小川 卓	留守	四・一〇	安波茶	大陵本部
奥村 祥三	留守	四・一〇	伊 祖	安波茶の戦闘に中隊連絡員として
尾関 親守	留守	四・一〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
小栗 良逸	留守	四・一〇	城 間	伊祖、城間の戦闘に擲弾筒手として
大西 栄一	留守	五・三	澤 紙	伊祖、澤紙の戦闘に隊の伝令として
大城 正盛	留守	六・二三	喜屋武	伊祖、仲西飛行場、喜屋武にて小銃手として
大石 澤蔵	留守	四・二八	城 間	伊祖の戦闘後不明
川上 博己	留守	六・二三	摩文仁	伊祖の戦闘に負傷、与那原摩文仁に小隊長として
川本 光	留守	四・二七	城 間	伊祖、城間の戦闘に擲弾筒手として
河野 平八	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘後不明
兼城 兼三郎	留守	六・二〇	喜屋武	伊祖の戦闘に小隊長として
兼戸 忠夫	留守	四・二〇	伊 祖	城間、屋富祖、仲西の戦闘に小隊長として
木村 千里	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘後不明
鬼頭 政雄	留守	四・二〇	城 間	伊祖の戦闘に小銃手として
紀頭 政一	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
黒田 稔男	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に連隊下士官として
倉知 秀一	留守	四・二〇	首里	安波茶、城間、澤紙、首里の戦闘に擲弾筒手として
小林 秀雄	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒分隊長として
近藤 一夫	留守	四・二五	城 間	伊祖の戦闘で小銃手、安波茶、城間に分隊長として
小坂 和智	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘後不明
後藤 行雄	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
泉 源吉	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘後不明
小浜 守一	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘後不明
佐藤 来	留守	四・二八	城 間	伊祖の戦闘に小隊長の伝令、城間の戦闘に小銃手として
坂下 勢一	留守	六・二五	摩文仁	伊祖、安波茶、城間の戦闘に部隊長伝令のち摩文仁に於
澤田 一夫	留守	六・二五	摩文仁	伊祖の戦闘後不明
三田 博雄	留守	六・二三	喜屋武	伊祖、城間の戦闘に小銃手として
塚竹 吉蔵	留守	六・二三	喜屋武	伊祖の戦闘後不明
白井 徳三	留守	四・二九	仲 西	伊祖、城間、仲西飛行場の戦闘に小銃手として
白木 忠雄	留守	四・二〇	城 間	伊祖、城間の戦闘に擲弾筒手として
鳥袋 伝春	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に分隊長代理、擲弾筒手として
鈴木 光一	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖、安波茶の戦闘に負傷、喜屋武戦闘に小銃手として
鈴木 弘	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に分隊長として
杉山 忠三	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に分隊長として
杉本 八	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に分隊長として
鈴木 鏡一	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
鈴木 昇	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
杉浦 吉雄	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
鈴木 達夫	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
平良 定春	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
玉城 寛	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
玉城 利常	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
田端 秀安	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
竹林 清一	留守	四・二〇	伊 祖	伊祖の戦闘に擲弾筒手として
田中 文雄	留守	四・二三	安波茶	安波茶連隊下士官として
田辺 正夫	留守	四・二三	安波茶	伊祖の戦闘後不明
谷口 伴一	留守	四・二三	安波茶	伊祖の戦闘後不明
玉来 清春	留守	四・二三	安波茶	伊祖の戦闘後不明
津田 松太郎	留守	四・二三	安波茶	伊祖の戦闘後不明

新植 正徳	鹿三郎	伊祖の戦後不明
寺田 秀一	糸子	伊祖、安波茶に中隊連絡係として負傷。山城、前平、摩文仁の戦場に小隊長として。
豊島 清一	市助	伊祖、城間、仲西、首里、津嘉山、山城、前平、摩文仁に分隊長として
戸谷 正則	仙之助	第六十二師司令部
戸松 寿	亀三郎	伊祖の戦場に小銃手として
当山 広久	〃	伊祖の戦後不明
徳田 誠栄	〃	安波茶の戦場に小銃手として
中上 茂	雪枝	伊祖の戦後不明
中村 守	源一郎	伊祖の戦場に第三中隊中隊長として
中田 金松	志小次	伊祖、城間、屋富祖の戦場に小銃手として
中田 龍栄	とみ及	仲西、城間の戦場に軽機手として
長澤 文雄	金之丞	城間の戦後不明
中山 新一	隆治	伊祖の戦場に中隊伝令として
長崎 春雄	祐一	伊祖の戦後不明
南谷 正男	勉基	伊祖の戦場に小隊長として
中内 英彰	静子	伊祖の戦後不明
西山 巨男	文助	伊祖の戦場に小隊長として
西山 潤夫	寿一	伊祖の戦後不明
野畑 潤治	初治郎	伊祖の戦場に小銃手として
野田 忠夫	せつ及	伊祖の戦場に小隊長として
倉山 忠藏	敬蔵	伊祖、城間の戦場に小隊長として
野木 茂	あい	伊祖、安波茶、首里、武官の戦場に小銃手として
林 高市	花子	伊祖の戦後不明
林 幸吉	清六	伊祖の戦場に小隊長として
原田専之祐	佐	伊祖、安波茶、首里、武官の戦場に小銃手として
林 幸市	キムエ	伊祖の戦後不明
服部 昇	丹治	伊祖、城間の戦場に小銃手として
馬場 茂	喜代蔵	伊祖の戦後不明
長谷川 孝一	千代	伊祖、安波茶、城間の戦場に小隊長として
東田 武治	アイ	城間の戦後不明
日高 實一	房枝	復員後死亡
樋口安次郎	〃	大政本部
比嘉 幸治	〃	山城の戦後不明
船橋 敏雄	〃	伊祖、安波茶の戦場に小銃手として
飯沼 幸三	〃	喜原武より不明
深澤平右衛門	〃	伊祖の戦場に指揮班長として
古澤 健	〃	伊祖、安波茶、城間、仲西飛行場の戦場に小銃手として
藤原 新一	〃	第六十二師司令部
兵衛 年一	〃	城間の戦後不明
堀 幸	〃	復員後死亡
堀川 幸吉	〃	大政本部
牧野 茂	〃	山城の戦後不明
松葉与三治	〃	伊祖、安波茶の戦場に小銃手として
的場 正三	〃	伊祖の戦場に指揮班長として
松本 秋	〃	伊祖、安波茶、城間、仲西飛行場の戦場に小銃手として
前田 菊男	〃	城間の戦後不明
前川 米吉	〃	伊祖の戦後不明
又吉 清治	〃	伊祖の戦後不明
三谷甚太郎	〃	城間の戦後不明
三輪 邦雄	〃	伊祖、屋富祖、城間、仲西、与那原の戦場に小銃手として
水田 敏雄	〃	城間の戦後不明
水谷 伊造	〃	伊祖の戦後不明
御田村秀雄	〃	伊祖、安波茶の戦場に小銃手として
宮下 幸助	〃	伊祖、城間、津嘉山の戦場に小銃手として
宮城 正徳	〃	伊祖の戦後不明
宮里 善徳	〃	城間の戦後不明
村上 進	〃	城間の戦後不明
森 清一	〃	伊祖の戦後不明
山田 春雄	〃	徳田隊(転属)
山田 幸夫	〃	安波茶の戦場に小銃手として
山辺正治郎	〃	伊祖、城間の戦場に小銃手として
山本 藤平	〃	伊祖の戦後不明
山内 康平	〃	伊祖の戦後不明
安井 新市	〃	五十八高地の戦後不明
若松 善行	〃	伊祖、城間の戦場に小隊長として
吉岡 善治	〃	山城の戦後不明
平野 正臣	〃	大政本部
伊藤 正臣	〃	伊祖の戦場に分隊長として
滝沢 正臣	〃	

備考  
 本名簿は長澤敏生氏が復員後の昭和二十二年一月、当時、千葉県千葉陸軍高等射撃学校に附けられた復員局へ提出した報告名簿であり、戦時中の記憶と日記を基にして作成されたものであります。

三輪 邦雄  
水田 政雄  
水谷 伊造  
御田村秀雄  
宮下 参郎  
宮城 正盛  
宮里 盛徳  
村上 進  
森 寿一  
森 清一  
山田 春雄  
山田 幸夫  
山辺正治郎  
山本 藤平  
山内 昌直  
安井 新市  
若松 義行  
吉岡 真治  
平野 正直  
伊藤 猛  
滝沢 正己



繁三郎 二〇・五・四 与那原  
元一 〃 〃 南風原  
はな 〃 〃 〃  
君江 〃 四・三三 安波茶  
志津江 〃 五・四 澤 砥  
惣一  
君子  
みさ  
つる 四・二五 安波茶  
安枝 四・二五  
キミエ  
新右衛門  
光  
ハツ 城 間  
美太郎  
清次郎  
クイ 〃 四・二〇 伊 祖

伊祖、屋富祖、城間、仲西、与那原の戦闘に小銃手として  
城間の戦闘後不明  
〃  
伊祖、安波茶の戦闘に小銃手として  
伊祖、城間、澤砥の戦闘に小銃手として  
伊祖の戦闘後不明  
〃  
城間の戦闘後不明  
〃  
〃  
徳田隊へ転属  
安波茶の戦闘に小銃手として  
伊祖、城間の戦闘に小銃手として  
伊祖の戦闘後不明  
〃  
五十八高地の戦闘後不明  
伊祖、城間の戦闘に小銃手として  
山城の戦闘後不明  
大隊本部  
伊祖の戦闘に大隊長として

備考

本名簿は長澤隊生存者が復員後の昭和二十二年一月、当時、千葉県千葉陸軍高射砲学校跡に設けられた復員局へ提出した報告名簿であり、戦闘間の記憶と日記を基にして作成されたものであります。

附記

本記録の編集に際しては、NHK中央研修所教授堀賢次先生に筆舌につくし難いお世話戴いた。  
堀様は私達が本書の企画をご相談申しあげた昨年四月から今日まで、幾度となく防衛庁戦史室に通われて戦史を詳細に調査され、或は名古屋まで足を運ばれて度々編集会議に出席され、ご指示を戴いたものである。また、私達のために座談会の速記構成を進んでおひきうけ下さったこともある。更には劇務の傍ら面倒な編集事務に当られ、夜を徹されたことも多い。  
私達の編集委員会と申しても所詮は素人の集合体であつて、企画はしたものの、見逃しは立たなかつた。堀様のご援助なくば、到底この仕事は来らなかつたといつても過言ではない。  
編集委員一同、稿を脱するに当つて、深甚な謝意を捧げるものである。

なお、ご遺族の方々のお問い合わせは、本記録一〇九頁、第三中隊生存者名簿の  
須崎治良八 (TEL)  
織田 直澄 (TEL)  
鈴木 義正 (TEL)  
吉田 広繁 (TEL)  
井土 邦一 (TEL)

へお願い申しあげます。  
また、第三中隊の転戦した北支、沖縄関係については、左記の資料がありますのでご参照ください。お取次もいたします。  
〔朝聖新聞社刊行 戦史叢書〕  
「北支の治安戦」(1)(2) 「河南の会戦」 「沖縄方面陸軍作戦」

©1972年11月第三中隊の記録編集委員会

黄塵と珊瑚礁 (リーフ)  
—— 独歩第二十一大隊第三中隊の記録 ——  
限定発行 一〇〇〇部  
発行 昭和四十七年十一月一日 編集 堀 賢次  
発行 第三中隊の記録編集委員会  
(名古屋市中区千代田二ノ一六―三八)  
株式会社 須崎モーターズ内  
印刷 有 信 社  
非売品・不許複製  
名古屋市中区不二見町三九

